

家庭・生活環境からみる支援について

—Aさんのケース報告—

○畑野 容子（公益財団法人 日本盲導犬協会）
中口 潤一（香川県視覚障害者福祉センター）
内田まり子（公益財団法人 日本盲導犬協会）
原田 敦史（公益財団法人 日本盲導犬協会）

1. はじめに

日本盲導犬協会 島根あさひ訓練センター（以下、訓練センター）では、2009年度から中四国地方在住の視覚障がい者を対象に1週間の入所生活訓練「視覚障がい短期リハビリテーション」（以下、短期リハ）を実施している。今回は、訓練センターの短期リハを利用したAさんについて、地元の福祉センターと連携して支援を実施し、若干の知見を得たので報告する。

2. 短期リハ概要

期 間：1週間（6泊7日）

対 象：中学生以上

定 員：4名程度

費 用：9,000円

訓 練：歩行、日常生活動作、パソコン、点字、ロービジョン訓練の中から本人の希望の科目を設定

修了後：自宅等でフォローアップを実施

1日の流れは以下の通りである。（訓練は1コマ75分）

7:30 朝食

9:30 体操

10:00 訓練1コマ目

11:30 訓練2コマ目

12:45 昼食

14:00 訓練3コマ目

15:30 訓練4コマ目

16:45 1日の訓練修了

18:30 夕食

訓練内容については、事前面接で希望の科目を確認してから1週間分のプログラムを作成する。科目には盲導犬との体験歩行も2コマ程度組み込んでいる。

4コマ目終了から夕食の前後は自由時間となっており、居室や訓練室で情報交換をしながら自習をする利用者がみられる。また、夕食後に利用者が食堂に集まり談笑する光景は各回で見られる。短期間の入所訓練ではこのような時間も利用者同士の重要なコミュニケーションの時間となっている。

帰宅時には訓練修了報告書を作成して実施内容の確認と今後の課題を提示する。この報告書は家族や関係機関へ提示することも考慮して作成しており、本人の希望があれば直接、関わりのある医療、教育機関に送付し、報告等も実施している。

3. 香川県視覚障害者福祉センター概要

香川県視覚障害者福祉センター（以下、福祉センター）は昭和41年に設置された。現在は以下の業務を行っている。点字図書・録音図書の製作・閲覧・貸出、点訳・音訳ボランティアの養成、パソコンボランティアの育成と視覚障害者へのパソコン技術支援、各種相談の受付、中途視覚障害者に対する社会リハビリテーション、日常生活用具の展示・斡旋。視覚障がいリハビリテーションについては県からの委託を受けて、2004年から歩行を中心に在宅・通所訓練を実施している。

4. ケースプロフィール

Aさん 33歳 女性

視力：右) 0 左) 光覚 先天性

眼疾患：網膜硝子体の変性、白内障、網膜剥離
等級：1級

家族：6人家族（本人、母、兄夫婦、甥2人）

生活環境：中山間地域。自宅は歩車道区別のない国道に面しており、住宅は点在しているが、周囲に目的地となるような商店などがない。

5. 経過 短期リハ参加まで

小学校卒業後、普通校から盲学校に編入した。

20代前半に保健医療科を卒業したが、免許は取得できず、他の就職もなかったため実家に戻った。その後10年間はほとんど外出することなく、自宅で引きこもりの様な生活をしてきた。数年前からガイドヘルパーを紹介され、買い物のために週に1回程度の外出するようになった。一日の大半は録音図書を聞いて過ごしていた。

2007年、福祉センターの在宅訓練を利用し始めた。これは家族の意向によるもので、理療免許取得、就職にむけての生活訓練であった。訓練内容は歩行と点字だったが、本人のモチベーションが上がらず中断となった。中断後も福祉センターが連絡をとり、関わるきっかけと方法を模索していたが、Aさんが具体的な行動をとるまでに至らなかった。

2009年秋、福祉センターの訓練士が短期リハへの参加を勧めた。Aさんは積極的ではなかったが、信頼する歩行訓練士からの助言により参加してみる気持ちになった。

2009年冬、訓練センター職員が訪問して面接を実施。訓練に意欲的とは言えなかったが、参加の意思は明確に示した。家族は本人の意思に任せている様子であった。

6. 訓練内容・結果

Aさんの1週間の目標と各訓練の内容、評価は以下のものであった。

(1) 目標

各科目の基礎的な知識・技術の確認と習得

(2) 歩行

3コマ実施。白杖の基礎操作を確認。階段は恐怖心から利用を避ける傾向にあったため、集中的に昇降時の訓練を行った。その結果、白杖の使用方法が定着したため恐怖心が軽減し、階段を利用するようになった。

(3) 点字

7コマ実施。読み書きの基礎を確認。書きではパーキンスブレイラーを使い、読みでは触読のスピードを確認した。L点字で50音が読める程度になったが、標準点字を読むには継続的な訓練が必要であった。

(4) 日常生活動作

5コマ実施。居室内の掃除や衣類の洗濯、物干し、調理動作については特に課題はなかった。家事動作への興味もあり、Aさんもやればできることは分かっているが、自宅では家族が家事を担当しているため、訓練内容を実践することはできないとのことであった。

(5) パソコン

1コマ実施。エクセルについて知りたいとの希望があったため簡単な操作体験のみ行った。

(6) 盲導犬体験歩行

2コマ実施。参加前から楽しみにしていたため積極的に歩行できていた。ただ、盲導犬取得については考える段階ではないということであった。

7. 参加時の様子

自宅で10年近く昼夜逆転の生活を送っていたため、参加当初は生活リズムがくずれ体調不良を訴えたが、訓練は休まずに取り組んだ。食事をきっちりと摂り、日中に訓練を受け、一定の睡眠時間を確保できたことで昼夜逆転の生活から規則正しい生活になった。

当初は無口であったが、食事の際に自分から他の参加者に話しかけてコミュニケーションを取るようになり笑顔がみられるようになった。「点字をもっと覚えたい」との発言があり、積極的になっていった。また、訓練に対する希望や質問も聞かれるようになり、次回も短期リハ

に参加したいと何度も話す様子が見られた。

8. 修了後の対応

帰宅前には生活改善の意欲が高まり、更生施設にて長期間の生活訓練を受けてみたいとの希望が聞かれるようになった。そのため訓練センターと福祉センターが自宅を訪問した。家族を含め、本人の希望・目標を確認し、今後のことを話し合った。しかし、Aさんは家族を前にすると積極的に発言できず、更生施設の入所希望についてもはっきりと自分の意思を示せなかった。家族は入所希望に対して反対はしないが、賛成とも言えない様子であった。この理由についてAさんに尋ねたところ、本人が年金の大半を家計に納めているため、更生施設に入ることとこれまでと同様の生活費の確保ができなくなると家族が考えているのではないかという答えであった。

さらに本人と話し合いをしたが、更生施設での訓練希望があり短期リハから帰宅後の2010年3月よりAさんの歩行・点字技術の向上と更生施設入所へのモチベーションの維持を目的に福祉センターで通所訓練を開始した。また多角的な支援を実施するため、地域の相談支援専門員にも経過を報告した。

9. 現在の状況

2010年9月、更生施設を見学した。しかし、生活訓練を希望する本人と、理療科への入所を勧める家族との間で意見の相違がみられた。また、入所後もAさんからの仕送りを家族が希望したため、Aさんの年金のやり繰りについても話し合いを重ねた。入所施設の利用費自己負担額とそこでの諸々の生活費を計算するとAさんに仕送りをする余裕はほとんどなかったが、Aさんはできる限り仕送りをする約束をした。

この頃になると更生施設入所に対するAさんの意思が固まり、意見を家族に伝えられるようになっていた。そして、地域の相談支援専門員が行政側とも積極的に連絡を取って手続きを進めたこともあり、2010年末までに本人の希望する生活訓練で更生施設へ入所することとな

った。

10. 考察

Aさんは短期リハに参加し、これまでの生活を変えるために行動をおこさないといけないという気持ちになった。これは、1週間という期間、自宅から離れて掃除や洗濯などの身辺動作ができたこと、他者と関わりを持ち、自分の意見を言えたことなどが自信につながり行動に移すきっかけになったのではないかと推測できる。さらにAさんにとって、地元の福祉センターの支援を継続して受けられること、地域の相談支援専門員が関わりを持ち続けたことが具体的な行動を起こす一助となっていた。短期リハ修了後も自立という目標を持ち続けられたのは、これらの支援があったからである。

今回、本人への生活訓練提供、更生施設見学への同行、家族への助言などのサポートが必要ではあった。しかし、自立に向けて行動を起こしたAさんが、なぜ10年間自宅でこもりがちな生活になってしまったのか。関わりを持つ中で以下の3つの要因が推察できた。

(1) 生活環境

居住地が中山間地域であり、気軽に出かけられる環境でないため外出することへの興味、意欲も徐々に低下したと推測できる。また、Aさんが盲学校を卒業した10年前は福祉センターの在宅訓練はなかったため、自宅に必要な支援を受けることが難しかった。

(2) 経済状況

Aさんは障害基礎年金を受給しており、家計の一部を補っている現状がある。就職して家計を助けたいという気持ちはあるが、自宅を出ることで家族に負担がかかると心配する面もあり、具体的な動きを取らなかった。

(3) 家族関係

家族はAさんの自立に向けた行動を応援する意思を示してきた。しかし、長期入所などの具体的な話になるとあまり積極的でない印象があった。これは(2)で挙げた家計の維持に関係しているのではないかと推察された。

改めて居住地域・生活状況によって適切な時期に必要なサービスが受けられていない視覚障

がい者の存在を実感するケースとなった。

11. 最後に

本ケースでは福祉センター、地域の相談支援専門員、訓練センターが関わったことにより、本人の生活環境については変化が見られた。しかし、経済面が絡む課題では本人だけでなく家族全体に関わることだったため、積極的に介入しにくく対応に苦慮した。我々が関わられたこ

とは、Aさんの生活を変えたいという気持ちを維持させること、自分の意見を表現できるように後押しすることであった。

更生施設への入所が決まってからのAさんは不安以上に期待を持ってその日を迎えようとしている。入所することが目的ではなく、Aさん自身の人生を見つめ直し、新たな目標を持って生活を送れるよう、連携を持ちながら今後も関わりを持ち続けたい。